

「与えられた賜物を生かして」

2018年10月20日

ローマの信徒への手紙 12章3節～8節 わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

パウロは、キリストに結ばれた者のなすべき務めの第一は「礼拝」と言う。「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」砕かれた心で神に礼拝を献げ、是認されている自分を確認し、そして、神の思いに聴き入る。そこでは、この世と妥協しない自分に新たに換えられ、善いことと完全なことが示され、神に喜ばれることを求める者となる。キリスト者を一言でいえば、礼拝する者である。礼拝は静的なことに見えるが、動的になるエネルギーの源泉である。礼拝の中からキリスト者の活動が生まれているのである。

パウロは次の勧めを語るに際し、「わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです」と、前置きしている。私に与えられた恵みを思い、あなたがた一人一人に言う。自分を過大評価してはならない。神が各自に分け与えた信仰に応じて慎み深く評価すべきである。人はその人なりの信仰、能力、性質を与えられているので、その人として認め合うべきである。「というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。」これは、パウロの教会論である。パウロはコリント教会に宛てた手紙で、教会をキリストの体と例え、体が多くの部分から成り立ち、一つの生命体を構成しているように、教会も集められた一人一人が部分を担い合って、生きて働くキリストの体なる教会になるのであると説明して来た。ローマ教会にも、同じように語っている。

そこで、パウロの第二の勧めの言葉は、「わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい」である。当時の教会においても、預言（説教）、奉仕（教会内活動）、教え（教育）、勧め（伝道）、施し（献金）、指導（訓練）、慈善（社会奉仕）などが求められた。パウロは第二の務めとして、与えられた恵みの賜物を生かし、必要とされているところに存分に献げなさいと言っている。教会はこのダイナミズムで、生き生きと成長して来たのである。